

層の御発展を心から祈念して「あやかる会」のお祝の言葉と致します。

(金沢北R.C 会報No.111 昭和五三年三月二三日)

柴田さん、おめでとう！

金沢東R.C 元会長 鈴木 菊男氏

柴田さん、おめでとうございます。私は昭和三三年十一月に金沢東R.Cに入会しましたが、入会当初は、周囲が偉い人ばかりに見えて例会に足を運ぶのも気が重いという始末でした。

ところが、五年目に会長が柴田さん、私が幹事をやれという事になりました。ロータリーの事を何も知らない私も、私なりに努力し、時あたかも東クラブ五周年という事で、毎日のように商工会議所の中の事務所へ通いました。その一年間、柴田さんから学んだ事は私の一生に大きな教訓を与えてくれました。

柴田さんはどんな些細なことでも、噛んで含めるような親切丁寧に教えて下さいました。しかもどんな事があっても決してしからぬのです。

その時以来、私は会社で社員をしからなくなりました。今日私と社員の間関係がうまくいって、低成長経済の環境の中で、社業を順調に発展させていっているのも、そのお陰です。

今日は柴田さんの二五年にあやかる会という事ですが、私には二五年に教えられる会という気がします。

どうか、柴田さん。益々お元気で、ロータリーや事業にご活躍下さい。

金沢東R.C 元会長 新名 健吉氏

私は柴田さんの推せんでロータリーに入り、いわゆる柴田学校の第一期生として、薫陶をうけ、柴田さんの後を襲って金沢東R.Cの会長をつとめました。

世上、厳しい先生ほどなつかしいといわれますが、柴田さんもその例外ではありません。ロータリー精神とは何か。ロータリアンとしての義務は？ 資格や品格は？ という事について、これほど厳しく深く教えられた人はいません。戦後間もなく、金沢がロータリーの全国大会を引受けた事があります。当時はまだ物心両面の混乱のさ中で金沢のような小さな町には大会をする力がありませんでした。

ところが、柴田リーダーは先頭に立たれて、「ともかくやろうではないか。無いものは努力で削り出せばいいではないか。」と、我々を叱咤激励されました。会場は吹きさらしの石川県スポーツセンター。テーブルがないので、私の方から持ち出した三六の人絹の布切れ

を敷いて何とか大会を成功させた思い出が深い感動と共によみがえります。

そうだった柴田さんのロータリー二五年の足跡は限りなく大きく立派なものです。

どうか、これからもロータリーのために、後進の指導のためにご活躍下さい。

金沢北RC元会長 越野 民男氏

私は、金沢東RCへ入会して二年目、会報委員を担当しました。卓話の要約を、一千字内外の文章にまとめる仕事ですが、その中で、柴田さんのソ連紀行の卓話が、三〇分というものの最初から最後まで、首尾一貫して抜く所が無く、困り果てたという思い出が残っています。それが、柴田さんという人を初めて知った出会いでした。

その後、金沢北RCが出来まして、山田さんや大村さんや私などと一緒に柴田さんが移籍された時も、厳しい恐ろしい人というイメージしかありませんでした。

ところが、金沢北RCへ移られてからの柴田さんは、文字通り円満玉のような温厚な人柄で、ロータリーの右も左も知らない後進を、やさしく指導されるという様に見受けられます。

おそらく柴田さんは、柴田ロータリー精神の灯を、金沢北RCの新しい皮袋の中に点じよう、古くて新しいロータリーを創ろうというお気持ちで、金沢北RCに来られたのでは

ないかと思えます。

私たちは、柴田さんが点じた灯を、新しい焚火に引き継ぎながら、何時までも燃やし続けて行きさいと思えます。どうか何時までもお元気で私たちをご指導願います。

金沢北RC次期会長 若野 三朗氏

金沢北RCが出来た頃、金沢東RCから移籍された人たちが、柴田さんの事を、ロータリーの生き辞引の様に云われたのを、私たちは、盲蛇におじずという言葉の通り、人事のように深く考えないで来ました。

ところが、その後、ロータリー活動を実践したり、各地の研修会や大会に出席したり、文献を勉強したりするにつれ、柴田さんの言動がすべて、ロータリー精神の神髄に触れている事が分り、柴田さんの偉大さが分りかけて来たような気がします。

柴田さんは、私はもう、長というものにはならない。一会員として後進の指導に当りたいと云われますが、そこには、すべてを経験された後で地の塩になろうという高い境地がうかがわれます。最近のザ・ロータリアンには、ロータリー五〇年という十数名のアメリカ人が紹介されましたが、どうか柴田さんも、ロータリー五〇年を目指して、何時までもお元気で活躍されますよう、お祈りします。

人の小さな善意が、それを愛けた人にとっては、一生忘れがたい強烈な印象を与えるということは世上稀ではありません。

十五年前にもなりましようか。「私の秘密」というテレビ番組がありました。

芹沢光治郎という有名な作家が、ご対面という場面で、沼津の或る家具会社の社長と対面しました。その家具会社の社長は、終戦直後の苦しい時代、幾度か商買を替えようと思っていた或る日のこと。そのセンスの良い家具屋さんのファンの一人であった芹沢さんから激励の手紙を貰ったのがきっかけとなりまして、事業をより以上に立派に成長させた訳であります。

芹沢さんは、自分がその手紙を出した事さえも忘れているのに、家具屋さんは、一生の恩人と崇めていたやりとりが、私の印象に強く残っております。

之と同じ様な話が、私のすぐ身のまわりにもあります。

三〇年前、私の父は、事情がありまして、勤め先の会社をやめなければなりませんでした。その事を家族にも云えないで、毎日、公園や図書館をブラブラしておりました或る日のこと。当時、石川県漁網組合の理事長をしておられた或る人から、一通の手紙を貰いました。

「貴方が挫折する事は、漁網界にとって損失です。どうか頑張ってください。」

手紙には、そう書いてありました。

四面楚歌の逆境の中で、父は大変感動しました。それが一つのきっかけとなりまして、清水製網を興し、私が引き継いで、ささやか乍ら今日に至っている訳であります。

その或る人というのは、他ならぬ柴田三郎さんです。私は、この話を二〇年前父が亡くなるまで、父の口から一度も聞きませんでした。

ごく最近、母がこの話をしまして、私は深い感銘を受けました。

恐らく今初めて、この話をご覧になる柴田さんは、手紙を書かれた事自体を忘れておられるに違いありません。

しかし、その一見さり気ない様に見える無償の善意が無限の価値を持っています。人間というものは、そういった所で、不思議に深く結びつくものかも知れません。

そして、その無償の善意こそロータリーの最も高い境地であって、そういった意識に裏付けされておられればこそ、柴田さんは、ロータリー二五才皆出席という前人未踏の栄光を、打ち樹てられたのではないかと私は思います。

“辿りつき 振り返り見れば山河を 越えては越えて来つるものかな”

柴田さん、二五年の山河を振り返りながら、更に五〇年の新たな山河に向って、どうかお元気で前進して下さい。私は息をひそめて、陰ながら柴田さんのご健勝を祈っております。

瓜畑に履を納れず、李下に冠を正さず

(瓜畑不納履、李下不正冠)

瓜畑のなかでは靴をはかない。瓜を盗むと見られると
いけないから。李の樹の下では手をあげて冠を正さな
い。李を取ると見られることを恐れるから。共に嫌疑
を避けたとえ。

例会は修練の道場

小松東RC第一〇〇回記念例会にて

今日は小松東RC創立二周年、第一〇〇回例会、会旗樹立という三重のめでたい例会に招かれ、非常にうれしく存じています。心からお祝いを申しあげます。

小松は私にとって思い出のクラブであります。本家の小松RCの創立は昭和三〇年の八月でありまして、当時は特別代表という言葉は使われませんでした。その頃の金沢クラブの会長は故、嵯峨さんで、私の尊敬する偉大な人物でしたが、その会長のもとに私が幹事をしておりまして、そのような縁で金沢クラブがホストとなり、会長に同行して八月小松に参ったのであります。その時の思い出の一つに、故、園山武平さん宅で古九谷の名品を拝観いたしましたのが、私の心にやきついていて離れません。園山さんも亡くなられて、あの古九谷の名品が今どうなったのか、淋しい思いがしてなりません。

小松RCの初代、二代、三代の会長は故、河村栄太郎先生で、この人は快男児でして、口

ロータリーの運営につきよくお逢いしましたが、これも思い出の一つでございます。

その後関戸隆祥会長るとき、私は分区代理をしていた関係で小松RCがホストの能美クラブの誕生に出席しました。能美と富米、それに志賀の三クラブが私の分区代理のとき出来まして面目を施したのであります。分区代理を辞めたあと、分区代理（石川第一分区）が金沢だけならいまわしになっているのはロータリーらしくないと、時の矢橋ガバナーに進言しまして、加登周一先生にお願いしました。おかげで、ある人達からいまだにうらまれているような次第でございます。

「加登先生、私の声が聞えますか？」先程先生から「柴田の声もずいぶん小さくなった」と言われましたが、私もおかげで、もみにもまれて、どうやらおとなしくなったようです。只今から私の申しあげるのはロータリーの心ということで、話の内容が固苦しくなりますから、眠くなったら寝て下さって構いません。私は自分で自分に言いきかせる積りですから……。

さて、私は元来が金沢クラブの会員で、金沢東ができる時に東に移籍し、次に金沢東がホストとなって金沢北クラブを作ったときに北へ移りました。その間二六年になります。私は二六年間皆出席の表彰を受けております。

いよいよ本論に入りますが、RI会長は毎年六月にターゲットを発表します。今年度の

ターゲットは「手をさしのべよう」ですが、これは全くすばらしい言葉だと思えます。これ以外にも毎年恒例に示されるターゲットは、カレンダーが一年終わったら棄てるのと違って、ターゲットは六月に終るのではなく永遠に続くものであると思えます。このターゲット集は、ロータリーのすばらしい教科書になると確信するものでございます。

「手をさし伸べる」ということは、先程加登先生がおっしゃったように、思いやりの心にほかならないのであります。

ロータリーには基本的な二つのスローガンがあります。すなわち、

“Service Above Self”

“He Profits Most Who Serves Best”

であります。この二つの柱がロータリーです。前の言葉は「奉仕が第一、自己が第二」後のは「サービスを最善にすることによって自からにも最大の神の報いがある」東洋流でいえば「積善の家に余慶あり」とでも言いましょうか。この二つのスローガンに秘められている哲学には、すばらしい真理があると、自からの人生経験からも確信しているのでございます。

昭和二八年、私といっしょに入会しました故、柿下正道先生（註…金沢医大内科教授）は今もし、ご存命ならば、旧第三六一地区随一のガバナーの適格者と信じております。先生

はどうしてもガバナーをお引き受けになりませんでした。あるとき先生に私が「ロータリーを一言でいうと、どうなりますか」と質問しましたところ、先生は即座に、

「ロータリーとは、人間を人間らしくするところ」

と言われました。私はさすがに柿下先生だと、今までより以上に先生を尊敬するようになりました。この言葉はまことにすばらしい言葉です。どうか今日のお土産にして頂きたいと存じます。

ロータリーは単なる社会奉仕の団体ではないことは言うまでもありません。ロータリーは心の団体であります。たとえば、オイルショックの時に利に走ってがっばり儲けて、そのほんの一部を社会奉仕のためと称して金を出す、これは少しも感心できることではないと思います。ロータリーには社会、国際、職業と三つの奉仕部門がありますが、いずれも自分の職業を通じて奉仕するのでありまして、金ではありません。とくに、がっばり儲けた金のほんの少しを罪滅ぼしに寄付するなどは、これはむしろ大きな罪悪であると思えます。

ロータリーは心であると申しましたが、これからクラブの例会の運営について、いささか考えていることを申したいと存じます。

ロータリーには幾つかの会議があります(国際大会、地区年次大会、地区協議会、IGF

など)。この中で最も大切なのは一週に一回の例会であります。例会は親和のグラウンドであると同時に、修練の道場であります。ロータリーにはメイクアップの制度がありますが一番大切なのはホームクラブでの出席であります。いやみを言う訳でもありませんが、このめでたい今日の例会に、欠席者が多いようですが、非常に淋しい思いがいたします。ホームクラブへの出席が第一で、次にメイクアップです。

その理由は、ロータリーの例会は「小松東クラブ大学の修練の道場」であることに立脚しているからです。私の尊敬する元岡山県知事で東京南RC会員の安積得也さんは、相当のお年ですが、壮年のようにお元気です。この方が建国二〇〇年のアメリカのRC例会を四つ訪問されて「四つのクラブの七つの驚き」と題されて講演されておられます。

それは、祈・笑・転・結・体・質・時の例会への指向であります。

日本のロータリーの例会は十年一日の如く、型にはまっていて中味が薄いのであります。

「祈」は祈りです。例会に祈りがあって欲しいということ。今日は「奉仕の理想」を歌いましたね。あるクラブでは「奉仕の理想」を歌わなければならないということはない。気分をほぐすためだから「春が来た」でもよいなどと言っておられますが、私は皆さんが起立して「奉仕の理想」を歌うことに大きな意義があると思います。そして「永遠に栄えよ我等のロータリー」で終るとき、合掌するなり十字を切るなりして、本当にそうでありま

すようにと誓いの気持を湧き起こして頂くとともに、この歌をうたう意義があると思うのです。これが祈りです。

「笑」日本のロータリーの例会には笑いがありません。外国では、あこにもここにも爆笑が起こっています。日本では隣同志一時間むつりしている。メイクアップした方に対して少しも温かみがない。やはり笑いが必要であり、そこからニコニコBOOXも生まれてくるのだと思います。日本の例会は、メイクアップにこられた方につれないと思います。

「転」は転回です。例会は日本中どこへ行っても一律官僚的に型がきまっています。もっとユニークなものがあってもよいのではないか。小松東で今月誕生の代表の方が三分間スピーチされましたが、これは非常にユニークです。帰ったら早速私共のクラブにも取り入れたいと存じます。要するにクラブ独特の転回が必要なのです。

「結」は結合です。会員はお互いによそよそしく袴を着たのではなく、お互いに握手をし、和気あいあいであればなりません。あるクラブでは作業衣を背広に着がえ、ネクタイをしめて例会に出席せよと内規に決めてありますが、そんなことではいけません。佐藤千寿先生は「ネクタイをはずして、フンドシをしめよ」とよく言われます。ネクタイだけでごまかしてフンドシがゆるんでいるようではいけません。作業服のまま、患者さんの診察が終わってすぐ白衣のまままで例会に飛びこんでくる、これがよいのです。形より心が大切

なのです。次に

「体」は体温です。隣り同志体温が通じないではうまくいきません。金沢北では最初に「手に手つないで」を歌い、例会が終わってから「奉仕の理想」を歌うようにしています。手をつなぎ合う、体温が通い合う、お互いに話し合う、これが修練の道場なのです。

「質」は質問のことです。例会が道場でありロータリー大学であれば、当然質問が出てこなければなりません。わからないことは質問する。そして語り合っているうちに友情も次第に深まってゆくものと確信いたしております。

最後は「時間」です。日本のロータリーの例会は一時間で終ることになっておりますが外国では大体一時間半です。私は時間の許す限り、三〇分早く来てお互いに話し合う、あるいは終了後残って話し合うということは非常に有意義なものと存じます。

以上、いろいろお話ししましたが、どうか皆さん、健康に留意されて益々発展されんことを心からお祈りいたします。どうもありがとうございました。

(小松市公会堂にて 昭和五四年四月三日)

一〇年「ひとふし」のロータリー

能美RC創立一〇周年式典にて

輝かしい一〇周年記念式典にお招きいただきまして、誠にありがとうございます。

喜びと感慨とを胸一杯に馳せ参じてまいりました。あれからもう一〇年、古くからの言葉に「十年一昔」とか「臥薪嘗胆十年」という大変味わいのある名言もございます。能美ロータリークラブがその一〇年いろいろな困難やご苦労もたくさんあったろうに、見事に克服され、今日の成長充実を遂げられ、今日こゝに晴れの創立一〇周年を記念する意義ある佳き日を迎えられました皆様に心からお祝い申し上げ、併せて深く敬意を表する次第でございます。ところで私事になりますが、私のロータリー歴二八年余りの間における、この一〇年前の当時の私自身を振り返ってみますと、私が最も情熱を燃やし、又ロータリーの実相を掴みかけた一番思い出多い時代でありました。当時のガバナーは大垣ロータリークラブの矢橋六郎先生でありました。矢橋さんは、ガバナー就任に当り地区内のロータリー

ーに対し四つの提言をなされました。

- ロータリアンには一人の見物席をも許されない。
- い、ことには道づれを作ろう。
- ロータリーはシンプルに、簡素に。
- いま世界に飢餓と疾病に苦しむ人の多くあることを忘れてはならない。

この四つの提言は、ロータリアンに対する比類なき卓抜した不滅の指針でありました。ちょうど一〇年前能美ロータリークラブ創立の席上、矢橋ガバナーは皆さんにこの提言を敢えて強調されました。チャーターメンバーの方々は定めし印象深くご記憶になつておられることと存じます。私はこの名ガバナー矢橋六郎先生の人格、識見に心酔し、尊敬し喜んで矢橋ガバナーの石川県分区代理として、当時の慌だしい社業の中に最善の努力を傾倒いたしましたことを、潜越ながら今日も自負しておるのでございます。当時の富山県分区代理は其の後ガバナーを務められた皆さんお馴染みの中田清兵衛さんでありました。ところで分区代理の私に与えられた第一の任務は、矢橋ガバナーの意を体して石川県に新クラブを作ることであります。かくして石川県には其の年度始めには一一のクラブがありました。矢橋ガバナーの在任中石川県に三つの新クラブが誕生するに至ったわけであります。

一番目は昭和四五年九月の富来ロータリークラブの誕生、二番目が今日のこの能美ロータ

リークラブの創立、そして三番目が羽咋の志賀ロータリークラブでございます。能美ロータリークラブは、昭和四六年三月二七日三三名のチャーターメンバーによって石川県一三番目、日本全国では一、〇六〇番目のロータリークラブとして呱呱の声を上げたのであります。現在石川県には二三のクラブ、全日本では一、五〇〇を遥かに超える活況であります。この点からみても能美クラブは県内においても国内においても、押しも押されもせぬ立派な中堅クラブになったのでございます。

申し上げるまでもなく、ロータリーのクラブも会員も創立の古きをもって、また長きをもつて必ずしも尊しとはいたしません。この貴重な歳月は、ロータリアン個々の修練とロータリークラブの活動の充実が蓄積なされたであろうことは言うまでもありません。

今日ここに一〇周年記念式典を敢えて催されました能美ロータリークラブの皆さんの意図は、定めしこの一〇年を回顧して、反省すべきは反省し改善し、評価すべきものは評価し、更に前進を期し、これを一つの区切りとして新たな意欲を燃やして内容の充実へ再発足を誓われる、意義ある新スタートの節目となさるものであらうと信じて疑いません。

ロータリーでは「十年一節」とも云われ、ちょうど其の頃が所謂更年期障害の中地みの時期である、と悪口を云う人もあります。この陰口を吹き飛ばしていただきたいとお祈りして止みません。

大変長いご挨拶となりましたが、最後に一言つけ加えたいと存じます。一〇年前能美ロータリークラブの創立に当り、スポンサークラブとして小松クラブの時の会長関戸隆祥さん、また、能美クラブの初代会長となられた浅井外治さん、それから、クラブ五周年の会長を務められた田川孝司さんなど、今日のこの日を迎えず既に故人となられたのは、誠に痛惜に堪えない次第でございます。皆さんと共に重ねてご冥福をお祈りして止まない次第でございます。当時能美クラブの創立には、いろいろな問題もありましたが、石川県では金沢ロータリークラブに次ぐ第二番目の歴史ある小松ロータリークラブが、いまだに子供を持たないのは怪しからん、というような調子で、私も随分強引であったことを今思い浮かべて苦笑を禁じ得ません。その時ご苦勞なされた小松クラブの時の幹事宮本幹雄さんも自ら進んで新しく創立の能美クラブへ率先移籍なされたそのお一人でございます。この外懐かしい思い出の方々も多くこの会場にお見受けして、大変懐かしさ一杯でございます。今は亡き田川孝司さんは私の竹馬の友でございました。その子息が引続き当クラブに入会なさったということで、先程入口で私に握手を求められまして、私は非常に感慨深いものを胸一杯に感じた次第でございます。以上申し上げて私のご祝辞とさせていただきます。

能美RC創立一〇周年記念式典に招かれて（創立当時分区代理のご縁で）

（昭和五六年三月二九日）

出席の「貯勤」に努めよう

「貯勤」は、私の新造語

磯貝さん（金沢北RCのメンバー）の北国銀行に貯金しましょう……と、敢えて強調したら、「あいつ、北国銀行の点数を……」と、言われるかも知れないが、それは、ロータリーの友情であり相互扶助の精神からである。不時の出費に備えての貯金が肝要であるように、ロータリーにおける例会への皆出席を全うするには、不時の場合に処してのメイク・アップによる「貯勤」ともいべき絶妙の制度を活用しなければならない。これもロータリーならではの「思いやり」からの発想である。

メイク・アップは、市内や県内や地区内はもちろん、日本中の、そして世界一五七カ国一九、五〇〇になんなんとする、いかなるRCの例会にも出席出来る特権が、われわれロータリアンに与えられている。しかも、何の予告もせずに、いきなり飛び込んで行っても、いつでも、よく来た……と、歓迎してくれて、まるで百年の知己のように語り合えるので

ある。これだけでも、まさに、偉大なるロータリーの組織と言わねばならない。

私は思う。ロータリーの出席を義務と考えるのではなく、素晴らしい特権としなければならぬ……と。大学では、定められた単位をとれば卒業できるが、卒業のないロータリーでは、いかに、有意義に参加し有効に出席するかであろう。ロータリーの例会は、修練の道場であり、親睦のグラウンドである……とすれば、例会の遅刻、早退、甚しきはカードに捺印しただけで帰えるのもあると言われるが、それは、特権の放棄であり、冒瀆である……と言われても仕方があるまい。むしろそのような多忙な時は、日を改めてメイク・アップによるべきであり、むしろ、開会ぎりぎりの出席よりも、早めに出て少しでも多くの人々と交流を深めたいものである。

週間中何回でも他クラブにメイク・アップしても差し支えないのである。特種な立場の人の極端な事例ではあるが、一カ年を通じて毎日、どこかのクラブの例会巡りを続けている人があると言う。それが可能な人もあろう。毎日、変った所で変った食事をし、変った人々と快談し、変った情報を耳にすることが出来るとあれば、また楽しからずや……と言すべきであろう。私は試みに、この一月中、市内の全RCの例会を歴訪した。

十一日(月)……金沢東RC、十二日(火)……金沢南RC、十四日(木)……金沢北RC、二十一日(木)……金沢北RC、二十二日(金)……金沢西RC、二十七日(水)……金沢RC、二十八日(木)……金沢北